



大阪民医連なにわの医療道場開催

八尾クリニック 大井所長「安楽死についてみんなで考えよう」 「自らが地域に出掛け患者さん宅へ行き、学び、 医師として何が出来るのかを見つけること」

生きる意欲を支える

患者にとって「生きる意欲」とは

たとえば

一人ぼっちでないと思えること

人との「きづな」の実感

笑顔と笑い

五感が刺激されること

見る、聞く、ふれる、味わう、風のそよぎ

2020/8/2

26



当たり前の日常を取り戻すこと

身体は自由は利かなくても住み慣れた自分の部屋、毎日目に入る天井の木目、窓、窓から聞こえてくる秋の虫の音、家族の声、顔、まなざし、交わす会話、家族への気配り。

- 病室の白い天井を眺め、小走りに廊下を急ぐ看護師の足音、詰所の心拍モニター音に耳をそばだてて死の恐怖と向き合う日々を送る患者。そのような患者に必要なものは、自宅での家族との「当たり前の日常」ではないのか。それをできる限り取り戻そうとすることが在宅医療の目標である。

2020/8/2

33

大阪民医連なにわの医療道場企画として、八尾クリニック所長の大井医師による講演が19日に行われ医学生7名・高校生4名が参加をしました。クリニックの訪問診療で携わる神経難病患者さんの事例の紹介をしながら、患者さんに神経難病チームとして寄り添い、支援するメッセージを出し続ける事、在宅療養を目指す『安心安全な療養条件をつくる』『自立度を高め「生活の質」の向上をめざす、「生きる意欲」を支える』ことについて話して頂き、自らが地域に出掛け、患者さん宅へ行き、学び、医師として何が出来るのかを見つける。地域にいくと、他職種の連携がないと成り立たず、患者さんを主に

した1つのチームで取り組むことが大切。訪問先での『また来るね、また来てね。』の会話、患者さん・家族から私たちが学び、自分自身が生きる意欲を頂いていると思っている。そこにやり甲斐を感じ、もっと地域に出掛ける医師が増えればとメッセージを頂きました。

参加者の感想「患者さんの当たり前の日常を取り戻すことが在宅医療だと言われたこと。今は想像でしか患者さんの気持ちや想いを類推することが出来ないが考え続けることで、医師になった際に今回のテーマである患者さんの環境と関係の改善に何が出来るかより深く考えられるのではと思う。」「自分の命は自分だけのものではなく、家族や友人がいて自分がいるのだということが一番印象に残った。患者さんの生きる意欲や生きがいとなるような事を会話を通して一緒に探していくことが大切だと感じた。」

大井医師のフェイスブックより「医療のなすべきことは、心身の苦痛を和らげる緩和医療も含め、死に至る過程まで患者の宣言ある『生』を生きる権利を全力を挙げて守ることに尽きると思う。人工呼吸器装着の神経難病の患者さんが家族と共に花見に行ったとき、桜を見上げる患者さんの笑みと涙に私たちは胸を打たれる。」